



野村病院に勤めて通算十六年間、こんなに長くなろうとは思っていませんでした。

初期研修明けの新人のころ、くねくねと川沿いの道をさかのぼってやっとたどり着いたのは、三百六十度山に囲まれたのどかな町。とんでもない田舎にきた、と実感したものです。

へき地に来る医師に対して、職員や住民の態度から感じることは、「こんな所にしか来られない先生」と、「こんな所に来てくれる先生」という二つの思いです。

温かさ思い出し

野村町の人たちからは後者の印象を多く受けました。中には、身内や親友のように何で

多くの人から無償の指導

話せ、私を思いやってくれる人たちもできました。そして、彼らの期待に応えるべく、立派な人から頂いた両手にいっばいの

花東は今でも忘れられない思い出です。その後、へき地診療所を経て

後期研修を終える時、温かい環境を思い出し、再び戻る気になったのです。

でも、私にも都市部に出たいと思ったことが二度ほどあります。

大学卒業の際、恩師に「偉い医師ではなく、立派な医師になるように」と言われました。医師になるということは医学部を卒業して国家試験に合格すれば終わりではありません。その後、さまざまなたちの指導を受けながら、常に成長していくことが必要です。

一度目は新人のころ、へき地では最新医療技術や知識の習得が難しく、医師として不安を感じたためです。この時は、病院の理解もあり、週一度の研修日を認めて頂き、何とか乗り切りました。

自分が多くの人たちから無償の指導を受けてきたように、多くの若い医師に自分の持てる知識や技術を少しでも多く伝えたいと思っています。

その後、後期研修ではさまざまな資格を取ることが出来、へき地で総合医としてやっていくの自信になりました。

臨床研修が始まり、当院にも毎月研修医がやってきます。描く将来はさまざまですが、彼らには患者としっかりと向き合い、信頼され、それに応える喜びを味わってほしいと思います。

二度目は子どもたちが大きくなり、進学を考えるようになってきた時です。家族で悩んだ末、単身赴任をすることになりました。最近では野村町もすっかり便利になり、取りあえず一人暮らしには不自由しなくなっています。

それに味をしめれば、じつくりと患者に向き合えるへき地医療の良さを肌で感じると思うのです。これからの私の仕事は、後継者を育成すること、そう思う今日このごろです。

川本 龍一 8期生、1985年卒



往診先で日なたぼっこをしている患者を診察する
研修医 2006年1月17日

西予市立野村病院

【私の勤務地】愛媛県西予市野村町は、松山市から車で80分の山中にあり、主産業は農業や酪農が中心。人口約1万2000人。高齢化が進み、3人に1人は65歳以上。大相撲の玉春日関の出身地。当院は120床の地域中核病院で、在宅医療から入院医療、老健施設の支援、検診など地域のニーズに幅広く対応している。